

日本語上級学習者の「が」「は」の使い分けに関する理解度について — 単文中で主語をマークする場合 —

田 村 泰 男

0 はじめに

日本語上級クラスに属する学生は、言うまでもなく、プレイスメントテストで高得点を取り、成績上位を占める人達であるが、実際、教育現場において彼らに接してみると、日本語教師が上級レベルとして要求している水準に必ずしも達していないことが往々にしてある。本稿で取り上げる、単文中にあって主語をマークする場合の「が」「は」の使い分けも正にその中の一つであり、学習者にとってはやや難易度の高い文法規則と考えられる。

この理由として、佐治（1992）に次のように述べられている。

「・・・、「が」と「は」は、「主語」「主格」「主題」といった日本語の構文の最も重要な部分にかかわり、述語と共に日本語構文の根幹を担うものであるだけに、そのあらわれ方も複雑であって、それが「は」と「が」の理解の困難な理由の一つになっている。」

「が」は格助詞であり、名詞に付いて述語に対するその名詞の格関係を表すのに対して、「は」は係助詞とか提題の助詞とか呼ばれ主題を提示し文の終わりまで係っていくという基本的な違いはあるが、同じ環境—すなわち、主語或いは目的語となる名詞句の後—に現れることがしばしばあるという事実が使い分けに関する理解を困難にさせているものと思われる。

本稿では、日本語の文構造において重要な構成要素であり、しばしば日本語学習者を手こずらせるこの「が」「は」について、上級レベルの学習者を対象として、その使い分け能力や理解度に関する調査を行い、現状を把握するとともに併せて上級クラスにおける文法指導の可能性を探っていきたいと思う。

1 調査の概要

本稿で資料を得た上級学習者は、全部で19人で、内訳は学部留学生6人、日本語・日本文化研修留学生11人、大学院レベルの研究留学生が2人であった。いずれの学生もプレイスメントテストにおいて日本語上級の授業の受講資格を得ている人達である。

また、調査では下記の例文を用いた。問いの数にして37問である。

【問題】 () の中に「が」か「は」をいれなさい。

- (1) 「あの人 () だれですか。」
「あの人 () 佐藤さんです。」
- (2) 「どの方 () 山下先生ですか。」
「あの方 () 山下先生です。」 / 「山下先生 () あの方です。」
- (3) 「デパート () 何時に開きますか。」
「デパート () 10時に開きます。」
- (4) 「だれ () 泣いているんだ。」
「となりの子供ですよ。」
- (5) 「東京と広島ではどちらの方 () 人口が多いですか。」
「東京の方 () 多いです。」
- (6) 「ケイトさん () パンと米ではどちらをよく食べますか。」
「わたし () パンをよく食べます。」
- (7) 「この列車 () 大阪行きですか、広島行きですか。」
「これ () 広島行きです。」
- (8) 「ブッシュさん () 大統領ですか。それとも、クリントンさんですか。」
「クリントンさんです。」
- (9) 「この列車 () 速いですか。」
「速いです。」
- (10) 「 $1 + 1$ () 2ですか。」
「はい、2です。」
- (11) 「ワインよりビールの方 () 高いですか。」
「いいえ、ワインの方 () 高いです。」
- (12) 「留学生のなかではトムさん () いちばんハンサムですか。」
「いいえ、ケントさん () いちばんハンサムです。」
- (13) 「わたしのいちばん好きな食べ物 () すきやきです。」
- (14) 「一年のうちで何月 () いちばん暑いですか。」
「8月 () いちばん暑いです。」
- (15) 空からなにか () 落ちてきた。
- (16) 知らない人 () わたしに話しかけてきた。
- (17) 日本でいちばん高い山 () 富士山です。
富士山 () 静岡県と山梨県の間にあります。
- (18) 「ここから富士山が見えますか。」
「ええ、あれ () 富士山です。」

- (19) 「きのう山火事があったらしいね。」
「原因（ ）タバコの投げ捨ててらしいよ。」
- (20) 「いい時計を持っていますね。」
「ええ。父（ ）これを買ってくれたんです。」
- (21) 地球（ ）太陽のまわりをまわっている。
- (22) わたしの父（ ）毎日6時に家を出る。
- (23) 太陽（ ）東からのぼる。
- (24) 消防車（ ）みな赤い。
- (25) 「きのうの午後、木下先生（ ）なくなったよ。」
- (26) 「顔（ ）赤いよ。」
「うん、ちょっと熱があるんだ。」

問(1)～(26)はいずれも単文中における「が」「は」の使い分けを尋ねたものであるが、今回は「象は鼻が長い」のような構文は問いに含めなかった。また、例文は必ずしも「が」か「は」の一方のみ可能というものばかりではなく(問(21)～(24))、コンテキストがあれば交代し得るものもあるが、学生には特別のコンテキストがない旨を告げ、その基本的なルールの理解度を調べることを主眼として、文中の空欄に「が」または「は」を記入してもらった。

なお問いで用いた例文は、筆者が作成したものと野田(1985)からそのまま借用したものとの両方から構成されている。また使用例文は、「が」「は」の使い分けについての全容を明らかにするために用いたのではないので不備な点もあると思われるが、平均的な日本語上級学習者の理解度についての概要は掴めるものと思う。

2 学習者の正答数及び正答率

19人全体の平均正答数は37問中26.6問で、率にして71.8%の正答率であった。しかしこれには個人差も大きく、正答数にして21問～34問、率にして56.8%～91.9%とかなり幅がみられる。

また、これら19人のうち、2大グループである日本語・日本文化研修留学生と学部留学生それぞれの正答数及び正答率の平均を記すと、前者が25.3問、68.3%、後者が、28.7問、77.5%となり、学部生グループの方が少しばかり勝っているという結果が出た。

これらの数字をどう見るかは、評価方法に負うところが多いと思われるが、単文中の基本的な項目を調査していることを考えれば、平均で71.8%という数字は決して高いとは言えないように思われる。

3 質問項目からみた調査の結果

本稿で調査した項目は大きく分けて次の四点に分けられる。なお、後であげる各項目のなかでのルールの説明については、野田（1985）を参考に筆者が整理したが、場合によってはそのまま引用したものもある。

- [1] 疑問詞疑問文 — 問(1)~(6)
- [2] 主語の選択/述部の選択 — 問(7)~(14)
- [3] 既知/未知 — 問(15)~(20)
- [4] 行為・出来事の単発性/習慣性 — 問(21)~(26)

これら問[1]~[4]それぞれの平均正答率は、[1]80.7%、[2]70.2%、[3]69.2% [4]60.5%であった。もちろん数字が示す通り、正答率と言ってもそれほど著しい差があるわけではなく、またそれぞれの項目の中で使用した例文によっても正答率に差はみられるが、この数字から、日本語学習の初期に学ぶ[1]の疑問詞疑問文については、当然ながら正答率が高く、[4]の単発性/習慣性に関する項目は、他の項目と違い、コンテキストに依存する場合もあるため正答率が低いということは言えそうである。

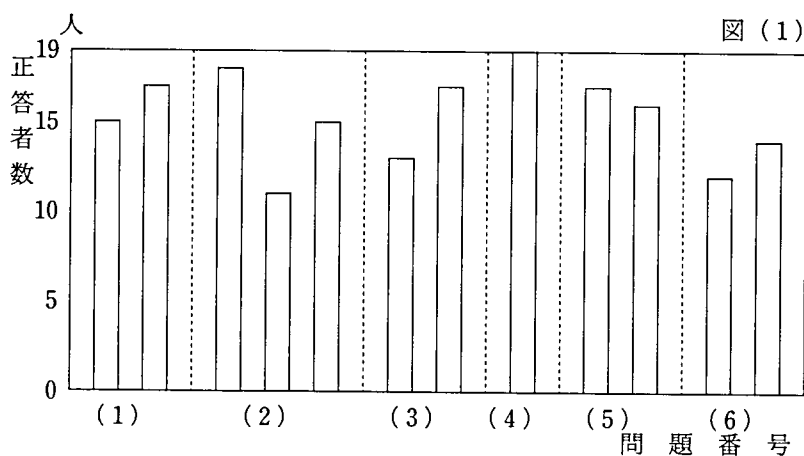
次にこの四点について正答数を表した図を用いながら考察していくことにする。

[1] 疑問詞疑問文

問(1)~(6)は、主語或いは述部に疑問詞や疑問詞を含む名詞句がくる疑問文とそれに対する答の文における主語マーカーの選択についての問題である。

つまり、疑問文中の主語が疑問詞や疑問詞を含む名詞句の場合 一問(2)(4)(5)一、その主語は「が」でマークされ、述部に疑問詞や疑問詞を含む名詞句がくる場合 一問(1)(3)(6)一、その文の主語は「は」でマークされるというルール及び、それに対する答の文では、主語と述部の位置関係が変わらない限り、疑問文中で用いられた主語マーカーが用いられるというルールを理解しているかどうかという問いである。

問(1)~(6)の正答数をまとめたものが図(1)である。



図(1)から次のことがわかる。

- 1) 主語に疑問詞や疑問詞を含む名詞句がくる場合 (問(2)(4)(5)) の方が、述部にくる場合 (問(1)(3)(6)) よりも正答率が高い (94.7%—70.2%)。
- 2) 主語に疑問詞や疑問詞を含む名詞句がくる疑問文に対する答の文では、当該の疑問文においてよりも正答率が低く (疑94.7%—答73.9%)、逆に疑問詞が述部にくる疑問文に対する答の文では、疑問文においてよりも正答率が高い (疑70.2%—答84.2%)。

なお、問(2)は、主述の位置を変えた答の文を二通り問いとしたため、問(2)の問題三つ全てに正解した学生は9人と半数を割る結果となった。

[2] 主語の選択/述部の選択

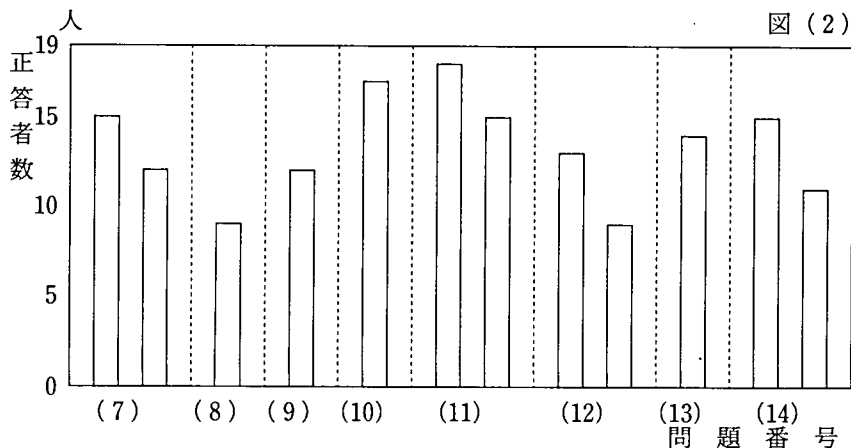
問(7)~(14)は、主語或いは述部の選択を求める疑問文及び、それに対する答の文における主語マーカの問題である。これらを小区分すると次のように整理できる。

- (7) 二つの述部から正しいものを選択する。
- (8) 二つの主語から正しいものを選択する。
- (9)(10) 述部が正しいか、正しくないか。
- (11)(12) 主語の選び方が正しいか正しくないか。
- (13) 述部を選んで伝える。
- (14) 主語を選んで伝える。

ここでのルールは次の通りである。

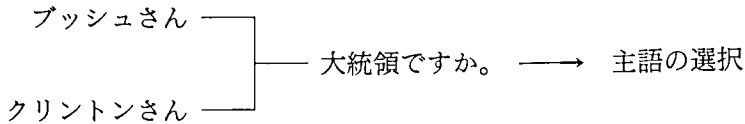
主語の選択を求める疑問文中の主語は「が」でマークされ 一問(8)(11)(12)(14)一、述部を選択する疑問文では主語は「は」でマークされる 一問(7)(9)(10)(13)一。答の文では、[1]の場合と同じく主述の位置関係が変わらない限り、疑問文中で使われた助詞が、主語マーカとして用いられる。

これらの項目に関する調査をまとめたものが、図(2)である。



ここでは、疑問文とその答の文両方について問う問題が四つあるが 一問(7)(11)(12)(14)一、そのいずれにおいても、疑問文に関する問いよりも答の文に関する問いにおいての方が正答率が低くなっており一(7)疑78.9%一答63.2%(11)疑94.7%一答78.9%(12)疑68.4%一答47.4%(14)疑78.9%一答57.9%一、特に、述部に「いちばん～」が使われている問(12)(14)の答の文において顕著である。

また、問(8)は問(11)に比べて正答率が低い、これは問(11)が主語の選択を問うものであることが比較的わかりやすいのに対して、問(8)では次のような文構造がわかりにくかったためと考えられる。



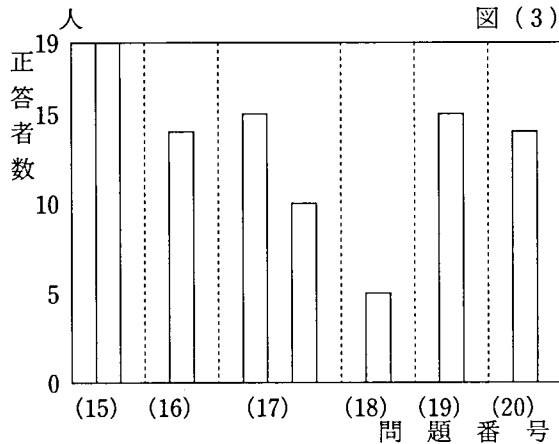
[3] 既知／未知

ここでのルールを整理すると次のようになる。

主語に不定／未知のものがくる場合、その主語は「が」でマークされる 一問(15)(16)一。逆に、既出名詞句が主語にくる場合、その主語は「は」でマークされ 一問(17)一、既出名詞句が述部にくる場合は、主語は「が」でマークされる 一問(18)一。

また、主語が既出名詞句と関係があり、その名詞句について何かを述べる場合、既出名詞句が主語にくる場合と同様に、主語は「は」でマークされ 一問(19)一、既出名詞句が述部にあり、伝えたい部分が主語である場合、その主語は「が」でマークされる 一問(20)一。

問(15)～(20)の正答数をまとめたものが図(3)である。



図(3)で目を引くのは、問(15)における正答数の多さと、問(18)における正答数の少なさである。問(15)では、「不定」という概念に対する理解の故にこうなったのか、或いは「疑問詞+か」に対する語彙的な知識からこうなったのかははっきりしないが、問(4)の疑問詞「だれ」が主語にくる場合と同様、正答率が100%になったことを考え合わせれば、後者の可能性が高いかもしれない。また、問(18)に関しては、既出名詞句が述部にくる問(18)の方が、主語の位置に立つ問(17)よりもかなり正答数が少ないのが注意を引く。

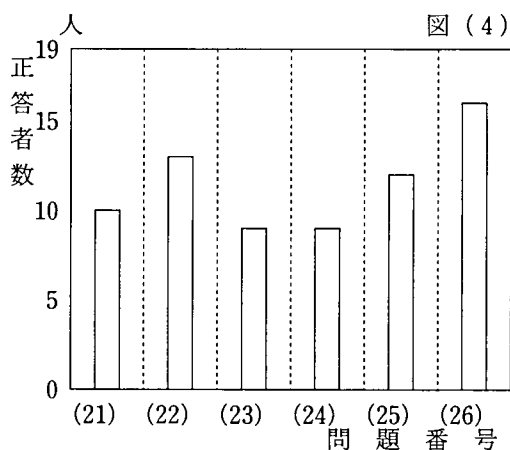
[4] 行為・出来事の単発性／習慣性

ここでのルールは次の通りである。

一回だけの出来事ではなく、「いつも～する／～である」ことを表わす文 一問(21)(22)(23)― や「どれも～である」を表わす文 一問(24)― の主語は「は」でマークされる。

また、思いがけない出来事や驚いた出来事が起こったことを述べる文 一問(25)― や一回だけの出来事を述べる文 一問(26)― では主語は「が」でマークされる。

問(21)～(26)の正答数をまとめたものが図(4)である。



ここでの問いは、先にも述べた通り、コンテキストによっては「が」と「は」の交代を許すものがあり、そのため正答率を下げているものと考えられる。特に問(21)や(23)では、目の前でその現象・状況を確認できれば、「は」ではなく「が」が用いられることになる。ただ、特別のコンテキストがないとすれば、やはりこれら問(21)～(24)の文は一般的な現象、習慣的な行為・状況を示すものであり、主語は「は」でマークされることになる。これら習慣的な行為・出来事に関しては、文法の中に項目を一つたてて指導する必要があるように思われる。

4 おわりに

言うまでもなく、「が」と「は」については、これまでも多くの論考が見られ、言語習得の面からも様々な角度から研究がなされてきた。しかしながら、いわゆる教室レベルでの調査・研究は、主として日本語学習の初期に主眼がおかれ、上級レベルの学習者に関するものがあまり見受けられないように思われる。確かに上級の授業は、より多くの語彙を習得したり、種々の文型・文体に慣れ親しむといった日本語全般にわたっての応用練習が中心になるであろうが、ここで見てきた通り、一口に「は」「が」の基本的な使い分けと言っても、その正答率が平均70%強でしかなく、また、項目によって理解度が異なったりしている。これらを考え合わせれば、やはり上級クラスにおいてもより理論的で包括的な文法指導が必要であろう。

<主要参考文献>

- | | | | |
|----------|------------------------|-------|--------|
| 佐治 圭三 | 『外国人が間違えやすい 日本語の表現の研究』 | 1992年 | ひつじ書房 |
| 野田 尚史 | 『日本語セルフマスターシリーズ1 はとが』 | 1985年 | くろしお出版 |
| 日本語教育学会編 | 『日本語教育事典』 | 1982年 | 大修館書店 |